

2021
No.
122

contents

令和2年度新指定速報展示

P1～P3

比叡山松禅院の仏像

学芸員のノートから

P4～P5

博物館と普及活動

～新型コロナウイルス感染症対策の中で～

収蔵品紹介

P6 悩ましい作品

青花琵琶湖八景敷瓦

狩野永岳下絵 1813年1枚 (本館蔵)



大津市歴史博物館

令和3年5月20日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

令和2年度 新指定速報展示

比叡山松禅院の仏像

令和3年6月11日(金)～7月11日(日)



この度、大津市坂本の松禅院に伝来した観音菩薩立像と地蔵菩薩立像が滋賀県の指定文化財になりました。それを記念して、新指定の速報展示を行います。

比叡山屈指の古像です。

今回の新指定された比叡山松禅院の2体のうち、地蔵菩薩立像は10世紀前半頃の造立と考えられているものです。比叡山延暦寺は、伝教大師最澄の開創以来、わが国最大の寺院の一つとして興隆しました。しかし、長い歴史の中で、建立と焼失を繰り返し、さらに周辺に多くの坊や関連寺院に仏像をはじめとした寺宝を移動させたため、本像のような古像はそれほど残ってはいません。ゆえに本像は、とても貴重な作例といえることができます。

ライトの角度で仏像写真は顔が変わります。

さて、この度の新指定にあたり、あらたに写真撮影を行いました。今回の歴博だよりでは、その仏像の写真撮影の際の、ライトの置き方についてお話ししたいと思います。

通常生活で人の写真を撮る場合、暗いとフラッシュをたきますね。そのフラッシュは真正面のカメラから光りますから、光が正面から当たるので、人の顔もペタッとした写真になります。これと同じで、ライトを仏像の正面の方から当てると、彫刻面の陰影が消えてフラットな写真となってしまいます【写真1 今回は少し陰影をつけています】。ですから、仏像の撮影では彫刻としての立体感を出したいので、このようなライティングは行いません。ただし、像の表面に彩色や截金文様

がある場合、その部分写真を撮るときは別です。特に金は金箔を細く切って貼り付けた文様ですから、正面からライトを当てると文様が浮き出て来るので、むしろ必須の行為となります。

図録や報告書の図版写真は、
程よいライティング。その加減が一番難しい。

ではどうするかというと、仏像の写真撮影では通常、斜め上方の左右からライト2灯で陰影をつけて撮影するのです。そうすれば彫刻面に影ができ、立体感を感じることができますようになります。【写真2】をみると、大きく弧を描く眉毛や、半眼のまぶた、立体的に尖らせる口元など、適度な陰影によってうまく浮き上がって見えます。彫刻史研究に必要な写真は、このように程よく立体的に彫刻面が感じられるものであり、多くの研究書や展覧会で使用される図版はこのようなライティングが行われています。とはいえ、そのライトの角度や強弱は人によって異なり、十人十色。それがカメラマンの個性となっており、その程よさを出すのに熟練の技が必要です。やはり彫刻である仏像は、平面作品である絵画や古文書とは違い、ある程度メリハリのある陰影がないと、絵にならないわけですね。

写真集やポスターの写真は、
魔術師のように光の強弱を使い分けて撮影します。

一方、このライト2灯の光の強弱をつけると、また雰囲気が変わってきます。【写真3】は、お像の左側(写真の向かって右)から強めのライトを当て、もう一方の右のライトを弱くして撮っています。【写真2】のように、左右からライトを同じ明るさで当てると、どうしてもお互いの影を消しあってしまうので、少しフラットになるのです。それを片方だけ強くすることで光を相殺せず、よりくっきりとした陰影を出すことができるわけです。ですから、ムーディーな雰囲気を出すことができ、彫刻としての味わいや魅力はこちらの方がうまく表せるといえるでしょう。仏像写真で有名な写真家さんたちはこのやり方で、それぞれ絶妙なライティングを持ち味としています。ポスターや絵葉書などでこのような写真を使う場合が多いのも、ゆえなしではありません。とはいえ、強弱をつけすぎると違和感のある写真となってしまう、さらにはどうしても暗い場所が多くなりますから、彫刻史研究にはあまり向いていないと考えられています。ただし、彫刻のノミ目や衣文の彫りについてはこちらの方が端的に表現を写し出すことができるので、「鈍彫り」像などはこの方法の方が好まれます。

お化け屋敷と同じライティングをすると、
仏像も怖い顔になります。

さらにもう一つ、面白いやり方があります。【写真4】は、ライトを正面の真下から当てた写真です。お化け屋敷や肝試しなんかでよくやる、顔の下からライトを当てる方法と同じです。光の角度が逆なので陰影のでも場所も逆になり、普段は上まぶたの影であまりよく見えない「眼」がよく見えるようになるなど、まったく別の表情になります。通常、学術調査の場合は、この下からのライティングが行われることはありません。われわれがこのような写真を目にするとすれば、お寺に安置されている様子を写した写真を掲載したパンフレットやムック本などを見た時でしょう。つまり、寺院に安置の場合は下からの光の方が多く、実はこちらの方がある意味正常なライティングなのかもしれません(とはいえ、ここまで下からの光は強くはありませんが)。

以上みてきたように、この4枚の写真にはそれぞれ個性があります。【写真1】は彫刻写真としては、いま一つですが、光がまんべんなく当たっているので、細部の図像を知るには適しています。目や顎下といった影になるところもよく見えます。そして、【写真2】では程よいライティングによって、誇張のないノーマルな顔つきを感じることができ、研究するのならやはりこれです。また本像の場合では、どちらかという童子のような可愛らしい顔つきにみえます。さらに【写真3】では、彫刻としては一番楽しめる写真です。本像の顔つきもきりっとしていて、ちょっとかっこよさが出てきています。一方、【写真4】では、なんだか怖い表情で、畏怖すら感じさせます。霊験あらたかな感じをもたせるのは、この写真が一番かもしれません。

このように、仏像はライティングによって顔つきや印象が変わるものなのです。ということは、撮影者が意図した作品としての写真、つまりバイアスを通して仏像をみることになるわけです。ある程度の印象操作がされている可能性があるということです。ですから、やはり仏像のことを知るためには、写真よりも現物を実際に自分の目で観ることが重要なわけです。もし、今回の展示をご観覧なされるのでしたら、懐中電灯をご持参されることをお勧めします。ご自身でライトを色々当ててみて、七変化するお地蔵さまのお顔とぜひともご対面してください。みなさんのお気に入りの表情は、どれでしょうね。

(学芸員 寺島典人)



【写真 1】 絵画と同じ、ほぼ正面からのライティング



【写真 2】 彫刻では通常の、上から 2 灯でのライティング



【写真 3】 2 灯のうち、片方を強く、もう片方を弱くと、強弱をつけたライティング



【写真 4】 真下からのライティング

博物館と普及活動 ～新型コロナウイルス感染症対策の中で～

ツイッターでの情報発信と展示品紹介が活発に

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症拡大は今も続いています。このノートでは、コロナ禍のもとでの博物館における普及活動の一つの記録として、令和2年度の当館の取り組みを紹介します。

当館では、2020年2月半ば頃から、団体見学や講演依頼の中止が相次ぎました。3月～5月に予定していたれきはく講座や現地見学会は早々に中止を決定し、4月18日から5月末まで臨時休館となりました。一度目の全国への緊急事態宣言が解除された後、6月2日から開館し、展示室を開けることができましたが、日々感染状況が変動する中で、来館を自粛される方が多い状況が続きました。この時期、全国で業種を問わずオンライン配信の取り組みが進められ、博物館施設では「おうちミュージアム」などと題して、各館がそれぞれの展示品の紹介や、収蔵資料を元にしたワークシート、工作キット、映像などを制作して提供することが活発におこなわれました。

当館では、企画展「江戸時代の琵琶湖水運」（会期：2020年2月29日～4月12日）にあわせて、博物館公式ツイッターで、日々1点ずつ、下のような写真を添えて展示品の紹介を始めました。



丸子船が写る明治末～大正の大津湖岸絵葉書（個人蔵）の紹介

その後も、「おうちで大津れきはく」として、常設展示品や各企画展の出品作品の紹介、30周年記念れきはくクイズなど、写真を添えて投稿を続けました。現在も、展示作品の豆知識や企画展情報などを更新していますので、ぜひ公式ツイッター（https://twitter.com/otsu_rekihaku）にご注目ください。

「遊ぼう！大津れきはく」をスタート

また、ホームページからダウンロードし、ご家庭で楽

しめる作品の提供を始めました。小中学校の夏休み時期



ホームページバナー

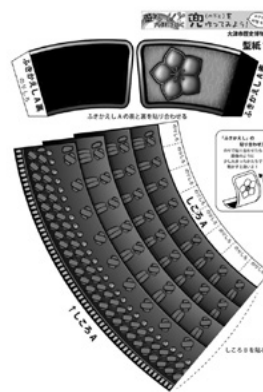
に合わせ、8月から「遊ぼう！大津れきはく」と題して、オリジナル工作キットのホームページ公開を始め

ています。これは、当館の受付職員5名が主体となって考案・制作したものです。第1弾は、歌川広重の描いた浮世絵から、大津の街道風景や近江八景を数点選び、塗り絵に仕立てています。かわら版風の詳しい絵の解説もついています。



「浮世絵めり絵にチャレンジ」めりえと作品紹介の解説シート

また、2020年は、大河ドラマ『麒麟がくる』の主人公・明智光秀が注目された年で、当館でも特集展示「明智光秀と戦国時代の大津」を開催しました。これにあわせて、光秀をイメージした戦国武将風のオリジナル兜ペーパークラフトもできました。こちらも解説付きで、カラー色付き版と好きな色を塗って作れるモノクロ版の2種類。A4用紙7枚つづりの型紙で、ご家庭のプリンターで印刷した後は、ハサミとノリがあれば組み立てられるものです。普通紙への印刷でも、組み立てると意外にしっかりとした立体に作ることができます。



兜ペーパークラフトの型紙1枚目と解説シート

これらは全て下記の当館ホームページからダウンロードできます。

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/event/asobou.html>

おうちでワークショップ

当館では、平成14年（2002年）から、毎年7月末～8月初め頃に、小学生向けのイベント、「夏休みおもちゃづくりワークショップ」を開催してきました。市内の美術系大学である成安造形大学との共同事業で、美術領域を専門に学ぶ大学生とともに、大津の歴史文化をテーマとした子ども向けのワークショップを開催しています。学生たちは、大学の授業の一環として参加し、ワークショップ内容の企画考案、キットの準備、当日の子どもたちへの指導をおこなってきました。小学生が博物館を訪れるきっかけの一つになればと始めたイベントです。令和元年度までに、延べ5,630人以上の子どもたちが参加してくれています。また、延べ500人以上の大学生が関わっており、その中には小学生の時にこのワークショップに参加し、後に成安造形大学に進学して企画する側となった学生もいました。

2019年には、これまでの内容を少しリニューアルし、親子で歴史資料を楽しく学ぶきっかけとなることを目指して、展示室の中にいくつも体験コーナーを設けた展覧会「昔のくらし展」を開催しました。

2020年は博物館で開催することはできない状況となりましたが、ワークショップを中止とするのではなく、各家庭で楽しめるおもちゃキットを制作して、宅配やホームページ公開によって届けることにしました。そして、「大津絵」をテーマとした、「おうちでワークショップ ワクワク大津絵スゴロク」のおもちゃキットが完成しました。

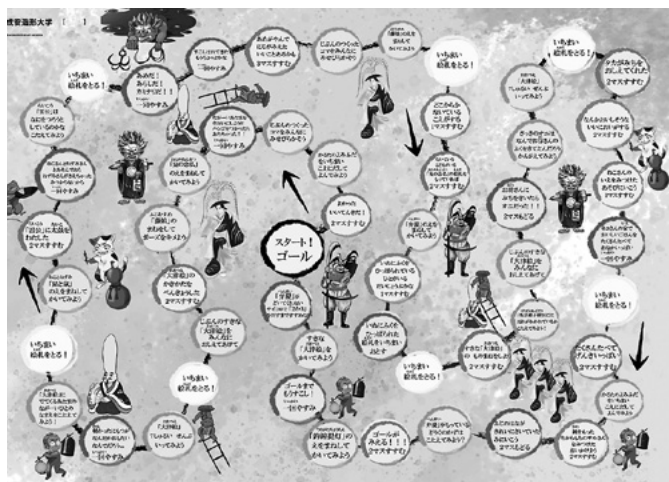


ホームページバナー

おうちで楽しめるおもちゃキットを考案するために、学生からは様々な案が飛び出し、消しゴムハンコや型紙を使って大津絵を描く案、大津絵のキャラクターを身近な素材で立体的な人形として作る案、スゴロクやかるた仕立てとして子どもたちが遊びながら大津絵を学ぶなどの案がありました。最終的に複数の案を集約して、大津絵キャラクターのうち藤娘・鬼・外法を作り、それを

大学も授業開始が遅れ、さらにオンライン授業が中心となっている状況でしたが、27人の学生が参加して

コマとして遊ぶスゴロクやキャラクターカードを考案するという内容で進めることになりました。学生たちは、スゴロクシートの制作班、キット制作班、大津絵かるたカード制作班、作り方動画の制作班に分かれて作業を進めました。



学生が考案したスゴロクシートとかるたカード

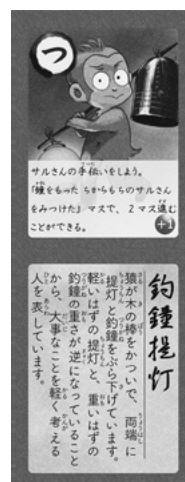
また、大津絵に登場するキャラクターや、キットの作り方を学生たちが解説する動画も制作し、期間中、当館ホームページ上で公開しました。

当初、このキットは宅配用として400組程を用意することとしていましたが、ホームページや市内の小学校へのチラシ配布で告知したところ、637世帯からの応募がありました。そこで予定していた制作数を増やし、最終的に459世帯にキットを送ることができました。残念ながら落選された方にも、全てダウンロードできるように整え、そのお知らせを発送しました。

多くの方に参加してもらうことができましたが、例年と異なり、実際におもちゃを作る時や遊ぶ時に、学生や博物館スタッフが関わることができません。少しでも双方のやり取りができればと、キットをお送りした皆さんに完成した作品の写真と感想を募ったところ、多くの反響がありました。感想を寄せていただいた方には、学生や当館からのコメントとオリジナル缶バッジを返送しました。

このように、去年は手探りの状況でしたが、これからも引き続きオンラインでの発信が求められています。博物館の情報や資料を皆さんの手元に届ける方法を今後も増やしていきたいと考えています。

（学芸員 福庭万里子）



悩ましい作品 青花琵琶湖八景敷瓦 狩野永岳下絵 1813年（本館蔵）

いきなり「悩ましい作品」などとタイトルに付けてしまいましたが、本作はとっても良い作品です。中国を代表する窯業地の景德鎮（現江西省）に、日本から15枚の発注をかけた青花磁器の敷瓦（うち9枚が現存）です。

まずその発注者について触れたいと思います。従来の論考や解説では、裏面の銘から、発注者を「摂州（摂津国）の橋本景留居士」としてきました。しかし、これは「大日本棋州（紀州）橋本 景笛居士嘱」として、現和歌山県橋本の景笛居士が発注したとみなすべきでしょう。つづいて、銘には制作年として「清嘉慶昭陽 作噩歳」と記されますが、これは太歳紀年法の標記で、嘉慶癸酉の歳（嘉慶18年=1813）を意味します。実は、これが悩みの種でした。というのも1813年（文化10年）は、絵付下絵を担当した狩野永岳がまだ24歳で、義父永俊（京狩野家八代）が没して同家を継ぐ3年前にあたるので、格式ばった署名「皇朝 狩野縫殿助金門畫史藤原永岳」を名乗るのは、つまり日本の朝廷における官職は「縫殿助」で「金門畫史（禁門絵師）」の称号を持つ「藤原永岳」である、と名乗るのは早すぎやしないか、と指摘されてきました。その点について、まず作品の性格を考えてみたいと思います。本作は15枚焼成という点で、茶の湯における贈答品として発注されたといえますが、それだけでなく、かなり唐物趣味（中国風道具趣味）の茶人達に向けたものといえます。茶道具で近江八景の絵付けを発注する場合、和歌のイメージに相應しいように、大和絵が達者な絵師に依頼し、焼成も京焼の窯に発注し、色

絵や鉄絵の陶製敷瓦が出来上がり、全て良しとなるころです。それを、あえて永岳に依頼したのは、景德鎮の官窯に発注することが第一の目的だったからでしょう。つまり、官窯に相應しい絵付け図案は、濃厚な漢画スタイルの描き手で御用絵師の京狩野家が適切である、として発注先が決定したものと思われます。題も「近江八景」とせず、あえて「江州琵琶湖八景」としたのも、「洞庭湖」の瀟湘八景に対して「琵琶湖」の八景としたものと思われる。

一方、1813年の制作年についての疑問は、強引な解釈をするしかありません。従来は、永岳が朝廷より正式に「禁裏御絵師御医次席」を授かるのが弘化3年（1846）であることから、実際の下絵の制作時期は下がるのだろと言及されてきました。ちなみに、永岳が作品に称号と官職を署名した早い例は、文政8年（1825）、36歳の時点のものです。1813年だと、さらに12年若く、かつ最初期作品ともなり、ハードルが高いのです。それを承知で強引な推測をすると、本作は日中の往復に数年を要する案件なので、依頼時点で先代の永俊がすでに衰弱していたら、納品までのタイムラグを考慮に入れ、永岳が代行し、署名も跡目相続を想定したものとした、というのがひとつ。もうひとつは、裏面の銘の末尾には「官工 陶貞恭製 十五枚」とあるように、官窯の官工に焼成してもらう磁器には、絵付下絵といえど、官職や称号を名乗る画院画家（御用絵師）でなくてならぬ、という配慮で、早すぎる官職と称号を記した、という見立てです。

ちなみに、発注者の景笛居士については不詳ですが、紀州徳川家の縁がある人物かもしれません。のちに永岳は紀州家にコンタクトしていますが、仲介者は景笛居士やもしません。

（学芸員 横谷賢一郎）

※リニューアルした近江八景コーナーで、本作をご覧いただけます。

